

第41回

わたしからの 人権メッセー

2020年度 特選作品集
堺市人権教育推進協議会

第四十一回

わたしからの人権メッセージ

特選作品集

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るいまちづくりをめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つが、本年度で第四十二回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

すべての人の人権が尊重され、自分らしく安心して暮らすことのできる平和で差別のない社会を実現することは私たちにとって共通の願いです。しかしながら、現在においても、同和地区出身の人々や女性などに対する差別や偏見、また虐待など心を痛める事象が起こつています。さらに、世界では、多くの人々の尊い命が、戦争や民族紛争等により失われています。

堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、すべての人の人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和と人権尊重のまちづくりを推進し、「誰一人取り残さない」持続可能な未来への目標であるSDGs（エスディージーズ）の達成に向けて取り組んでいます。

本冊子には人権が尊重され、平和で差別のない社会を創り出そうという応募された皆様の真つ直ぐな熱い想いと、真摯な姿勢があふれています。

今年は、新型コロナウイルスの感染拡大による多大な影響が生じ、皆が不安になる中、感染した方や家族、治療に携わる医療関係者に対して、不当な差別や偏見、いじめ、誹謗（ひぼう）中傷などが大きな問題となりました。私たちは、さまざまな人権問題を自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で積極的な行動へと発展させていくことが大切です。

本冊子が、一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのきっかけとなり、私たちのまち堺から人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇二〇年十二月

堺市人権教育推進協議会

会長 金 丸 尚 弘

もくじ

□ 相手の立場に立つことの大切さ	1
□ 今の私の日常	3
□ 国の違い	5
□ 稲葉先生の話聞いて	7
□ 祖母の死から考えること	9
□ コロナ差別	13
□ 伝えたい想い	15
□ あたりまえってなんだろう	17
□ 私がおくれる人権メッセージ	21
□ 「性」と「偏見」と「人権」について	23

□ 平和について	・ ・ ・ ・ ・	25
□ これが私のできること	・ ・ ・ ・ ・	27
□ 自分を信じて	・ ・ ・ ・ ・	29
□ かけがえのない笑顔	・ ・ ・ ・ ・	33
□ 父がくれた命と言葉	・ ・ ・ ・ ・	35
□ これからの女性の活躍	・ ・ ・ ・ ・	37
□ 大人になる中で失ってしまったもの	・ ・ ・ ・ ・	39
□ 祖母の知りたかったこと	・ ・ ・ ・ ・	41
□ 迷いのトンネル／日本語学習	・ ・ ・ ・ ・	45
□ 炭鉱の町に生まれて	・ ・ ・ ・ ・	49

※ご本人の希望により、お名前等が掲載されていない場合があります。

相手の立場に立つことの大切さ

小学校三年

長濱光紗
なが はま み さ

：：音のない世界。それが、私とそ父との世界です。私のそ父は、ちようかくしうがい者で、私とそ父のコミュニケーションは手話です。今年、一月にそ母が亡くなりましたが、そのそ母もちようかくしうがい者でした。そ父の家に行くとき音のない世界がはじまります。今年に入り、新がたコロナウイルスの感せんが広がり、かく大する中、感せんした方やたいさくにたずさわった方々にたいして、インターネットやSNSなどでひどいことを言ったり、したりしてさべつ、へん見、いじめなどのひがいをうけている方がいることを知りました。それを知ったときに、同じ人間なのになんで相手の立場になつて物が言えないのかなとむねがくるしくなりました。それと同時に私もいやな思いをしたことを思い出しました。それはそ父と手話で話をしていたときのことです。周りの人が、私たちのことをじろじろとへんな目で見てきたり、指をさされたりしたことがありました。そのとき、私は、「手話を使う人はだめな人なのか。日本語しゃべらないと日本では生きていつてはいけなのかな。」そんな気分になりました。

私は、そ父と話がしたくて、手話をおぼえました。手話はむずかしかったですが、おぼえるとそ父との会話が楽しくなりましたし、そ父の世界に少し入れた気がしました。私があのとときに手話をおぼえず、そ父と話をしようとしなければ、私もじろじろへんな目で見た人や、指をさした人たちの世界にくわわっていたかも知れません。相手によりそって、同じ立場で話をするとはんけんやさべつの気持ちが生まれないうことを手話を通じて教えられました。

人は、自分とちがつていたり、弱い立場にある人々にたいしてへん見やさべつをし、相手をおいつめてしまうことがあります。そういう人に言いたいです。自分がされたらどうですか。相手のことを考えて言ってください。

世界中からへん見やさべつの社会がなくなるよう私ができることをやっていきたいと思っています。

今の私の日常

小学校六年 小島 瑠莉

(この作文は五年生のときに書かれたものです。)

私は、五才のとき、足が不自由になりました。幼稚園のときに初めて車いすに乗って始めはこわかったけど小学生になって少しずつなれてきました。でも、スピードを出しすぎると曲がりきれなくて、何度かこけたことがあります。それ以外でも毎日、車いすで生活をしていて、いくつか不便で困っていることがあります。みなさんは、車いすに乗っている人がどんなことで困っているか知っていますか。困ったときに、どんな気持ちになるか想像したことがありますか。

私は、よく友達と近所の公園に行きます。公園に行くと、すべり台やブランコなどの遊具を使って遊んだり、おにごっこをしたりします。おにごっこをしているとせまい道やポールがあります。そういうときは、別の道を探さなければいけません。また、遊具で遊んでいるときは、地面がくぼんでいる所や砂場に、車いすの車輪がはまり、ぬけなくなることがあります。そういうときは、自分で車いすをそう作してぬけ出さなくてはなりません。

いつも、困ったときは、自分でどうしたらいいか考えて、解決するようにしています。

しかし、解決できないこともあります。どうしても解決できないときは、あきらめることがほとんどです。そんなときに、そばにいる友達や家族、大人の人に手伝ってもらうことがあります。あきらめてしまうところを、手伝ってもらうことで、みんなの私に対する大切な思いが伝わり、ほつとします。その度に、感謝の気持ちが自然と口に出ます。

これから、大人になって、社会に出るときには、だれでも不便なく利用できる環境であるバリアフリー、ユニバーサルデザインが進んでいるといいなと思っています。私にとっての大切な人に感謝する気持ちを忘れず、自分でできることは一生けん命とりにくんでいきたいです。



国の違い

小学校六年

平田 真梨奈
ひら た まり な

私の学校には、シリアから来た女の子がいます。私はその女の子と仲良くなっている。いろんなことを話し合える仲間になりました。そのうちに自分とちがうところがあることに気がつきました。

その一つは給食は、パンかご飯と牛乳だけで給食に出てくるおかずは食べなかったことです。また、ある時期には水しか飲んでいない時期もありました。そのときは、何でみんなとちがうことをしているのかなと思いました。その理由は聞けませんでした。みんなとちがうことをしていることがかわいそうだと思ったからです。

二つめは、五年生になったとき、頭に布をまいて学校に来たことです。そのとき、その友だちは泣いていました。そのときは理由を聞きました。「みんなとちがうからいやだ」と言っていました。

私はなぜちがうことをしているのかと思い調べました。シリアの宗教はイスラム教でイスラム教にはいろいろな決まりがあることを知りました。その一つは豚を食べたり、お酒を飲んだりしてはいけないことです。だから友だちは給食ではパンかご飯と

牛乳しか食べていないのだと気づきました。それから女性は、ある年れいになると顔と手以外をかくさなければならぬそうです。私は友だちが泣いているとき、いやなら日本人と同じようにすればいいのにも思いましたが、その友だちの立場になつて考えてみるとシリアの国の宗教や風習をもっと理解して話してあげたらよかったと思いました。

世界には多くの宗教や人権、風習の違いがあると調べて分かりました。私は人としての人権を尊重して生きていける大人になりたいと思います。



稲葉先生の話聞いて

支援学校中学部一年

木 き
全 また

匠 たくみ

私は稲葉先生の話に同感した。

稲葉先生は、小学生のとき、事故にあつて両耳が聞こえなくなつてしまった。私はその話を聞いて、かわいそうに思った。

私は生まれつき耳が聞こえなかった。

聞こえる人に少しあこがれていた。聞こえる人だったらどれだけはなれていても聞こえるのか、プールなどではどんなふうに先生の声が聞こえるのか、など他色々なことが知りたい。幼稚部のとき、一緒に通っていた女の子がいた。でも、その女の子は、小学校に上がるとき耳の手術を受けて耳が聞こえるようになった。私もその手術を受けたいと何度も思ったことがある。でも、聞こえないからこそ役に立つこともある。例えば寝るとき、お父さんのうるさいいびきが聞こえないので、ぐっすり寝れるなど。補聴器をつけて暮らしているので声は大体聞き取れる。でも、ひそひそ話ができないのは悔しかった。

でも、私は私、聞こえる人は聞こえる人。

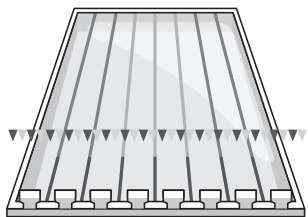
小学校を卒業するまで入ってたサッカークラブのメンバーはとても優しくてうれしかった。耳にボールが軽く当たっただけで、

「補聴器大丈夫？」

と心配してくれる。監督もゆつくり大きく話してくれるので、何を言っているのか分かりやすくうれしかった。とても最高のメンバー、監督に出会えてよかった。

地域の小学校に交流に行ったときに、プールに入ることになった。もちろん私も入るので、補聴器をはずした。みんなが、聞こえないのに気づかってくれたので、プールサイドに上がるタイミングや、プールの中で何をするのかが分かった。なので、とてもうれしかった。

耳が聞こえないのは不便だけど、聞こえる人の優しきで、生きる勇気を与えてくれる。これから大切に生きていきたいと思う。



祖母の死から考えること

中学校一年

植^{うえ}村^{むら}のの

私の祖母は去年の末に亡くなりました。

祖母は若くしてリウマチを患っており、動きが不自然でした。後に難病である「脊髄小脳変性症」も発症していると診断されました。それからというもの、祖母は支えがないと歩けなくなり、車いすになり・・・と徐々に日常生活がそれまでと同じ様には送れなくなっていました。

そうなると当然、介護が必要になります。祖母の介護は祖父がしていました。ですが、元気な祖父も、介護に限界を感じるようになり、しばしばショートステイを利用するようになりました。ショートステイ先は私の家から近かったので、よく会いに行きました。私の父と私のいとこ家族の休日が合った日には祖母に会いに行きました。そこでは祖父の手伝いをしたり、車いすにのった祖母と散歩に出掛けたりしました。言語リハビリのために集まった皆でカラオケをしたことは良い思い出です。

笑顔の多い祖母でしたが、少しずつ、けれども確実に病気が悪化していきました。

最初は大きなものを飲み込むことができない程度でしたが、やわらかくしても飲み込めない、細かくしないと食べられないなど、どんどん自分の口から食べることが難しくなっていました。その後は

「座っているのも辛い」と口にする程でした。

亡くなる数日前、祖母は発熱して入院しました。けれど、祖母の意向により退院し、当初から祖母が希望していた通り、自宅で家族に囲まれて最後を迎えることができました。星がきれいな、夜のことでした。

最後には座っていることもできなくなった祖母でしたが、たくさんの人に支えられ、最後まで祖母らしく生きられていたと私は思います。

私が思う高齢者の人権は、「残りの人生を本人らしく生きること」だと思います。これまで、生活をしばってきいていたものから解放され、「たった一人の自分」として生きられる。そんな環境を作ることが今の私達にできることだと思います。

祖父を見ていて、介護はとても大変で、辛いことだと思いました。しかし介護サービスを利用したり、家族で助け合うことで、楽しい時間もたくさん作ることができたと思っています。介護する人も、介護される人も、その周りの人もみんなが生き生き

と暮らせる社会の実現には何が一番大切か。やはり「おたがいを思いやる心」だと私は思います。



コロナ差別

中学校一年

川 かわ

口 ぐち

優 ゆう

奈 な

世界中で感染が止まらない新型コロナウイルス。日本でもすでに感染者数は約五万人、一千人を超える方が亡くなっていて、毎日のように新規感染者の最多を更新している。そんな中、私はびつくりするニュースを目にした。コロナウイルスに感染した患者や医療に従事している方が差別をうけているというのだ。とても信じられなかった。たのめずは調べてみることにした。

実際に、コロナ差別といった言葉でインターネットで検索すると、すぐに多くの差別の具体例と、市役所などの注意のお知らせが目に入ってくる。インターネットに住所などの個人情報を書き込み、家に石や卵を投げつける、落書きをする、ビラをまく、マスコミはその場を撮って放送するなど、その地域全体での差別のようだ。さらには、その患者を救うために現場で一生けん命働いてくれている医療に従事している医師や看護師、その家族までが差別を受けているというのだ。私は心から悲しくなった。私が住むこの国ってこんなひどい国だったのかと。確かに患者には近づきたくないという気持ちは分かる。私だってコロナウイルスに感染したくはない。しかし患者は、保

健所の指示の下で、きちんと管理されている。ワクチンや薬の開発はまだだが、今で
きる限りの治療が行われている。また、国などの指示に従わない一部の人を除いて、
多くの患者は知らないうちに感染していたり、医療に従事している方は、患者の治療
中に感染したりしている。専門の方でも感染するほどの感染力をもつコロナウイルス
に感染することは罪なんだろうか。差別を受けるべき対象なのだろうか。絶対に違
うと大声で言いたい。コロナウイルスはすでに身近にいる。これだけ感染が広がれば、
誰がかかってもおかしくはない。だからこそみんなで力を合わせて乗り越えてい
くしかない。患者を差別しているような場合ではない。いまこそ日本の国の力が問わ
れていると思う。国民に言いたい。「みんなで乗り切ろう。必ず終わりは来るから」と。
私は将来医療に従事することを考えているが、今回の差別のニュースを見て、改め
て医療に従事したいと思った。多くの患者を治療していくことになると思うが、その
患者は様々である。病状はもちろん、人生、考え方、家の事情等。また今回のように
差別を受けた患者と接するかもしれない。しかし、私は患者にしつかりと寄り添い、
病気を治すことに全力をつくしていきたい。また全ての人に平等に医療を提供してい
きたい。みんなが安心して幸せに暮らせる社会を実現するために。

伝えたい想い

中学校一年

古 ふる

川 かわ

智 とも

悠 はる

僕は、小学校六年生のときの先生に感謝しています。

僕は、小学校六年生の四月頃にいじめられたわけでもなく、勉強が分からなくなつたわけでもないのにキレました。親になべや辞書など目につくものを手あたりしだいに投げました。

そして、五月のゴールデンウィーク明けに学校に行けなくなりました。玄関に行つても足が動かず、宿題や勉強など今までできていたことができなくなりました。そのとき親は必死に学校に行かせようと思いました。僕はうつとうしいなあと思っていました。休みが続くと先生は電話をかけて下さったり自宅まで訪ねて下さったりしました。そのときはどうせ両親と同じように学校に行けと言われるのだろうと思ひ会わずに逃げまわっていました。だから、母だけが対応することが多かったです。しばらくたつて少し会ってみると親とは違うと思いました。先生は学校に来いとは一回も言わずにクラスのことや、好きなつりの話などをして下さいました。だから、僕は段々と気軽に話せるようになり、先生が来られるのを楽しみにするようになりました。

夏休みが明けても登校することができませんでした。でも、九月の末にあつた修学旅行の前日くらいから学校に行くようになりました。その修学旅行はとても楽しかったです。でも次の日学校に行く気満々だったのに足が動かなかったのです。今も休んでしまった理由を考えていますがなぜかよく分かりません。父に

「楽しいところだけ参加するのはずるい。もう学校に行けるはずだろう。」

と叱られて、学校に行くようになりました。しかし、それは長続きしませんでした。このときも先生は、

「智悠の意思を尊重する。」

と言つて下さいました。三学期のほとんどを欠席してしまいましたが、先生はせかすことなく度々訪問して下さいました。

そして、三月の卒業式の日、僕はついにもう一度足をふみ出すことができました。その勢いで四月の入学式も自分から学校に行けました。両親はとても喜んでいました。今は少し不安定なところもあるけれど登校しています。僕に学校に行かない権利があるかどうかは分かりません。しかし、自由に生きる権利を守つて下さった先生のおかげで立ち直れたのは確かです。僕が完全に立ち直れたと思ったときに先生にこう伝えたいのです。

「ありがとう」とー。

あたりまえってなんだろう

中学校二年

西川 にしかわ

奈美希 なみき

今の世の中外へ出て町を歩くと、ほとんどの人がマスクをしている。絶対につけなければならぬというわけではないのに。法律があるわけではないのに。自分の身を守るため家族のためまたは、国のためにしている。日本は、マスクをするという習慣がある国。今の状況ではあたりまえだろう。

私のお父さんは障がい者を支える福祉支援センターで働いている。いろんな方からの相談を受けたり障がい者の方と会話したり、お手伝いをしたりしている。緊急事態宣言が出されたときでも毎日仕事にいつていた。障がい者の方も変わらずセンターに来ていた。

最近、仕事の話聞いた。障がい者についての話だった。障がい者とコロナ。考えたことがなかった。話を聞いているときにふと思った。お父さんに聞いてみた。

「障がい者の方って、マスクできるん？」

「できひんよ。」

とお父さんは答えた。

「コロナっていうのも分かってるんかな。」

「どうゆう状況なんかもわかってへんよ。」

といわれたときはびつくりした。全く知らなかったし、本当に考えたこともなかった。なぜならあたりまえだと思っていたから。お父さんがくわしく話してくれた。

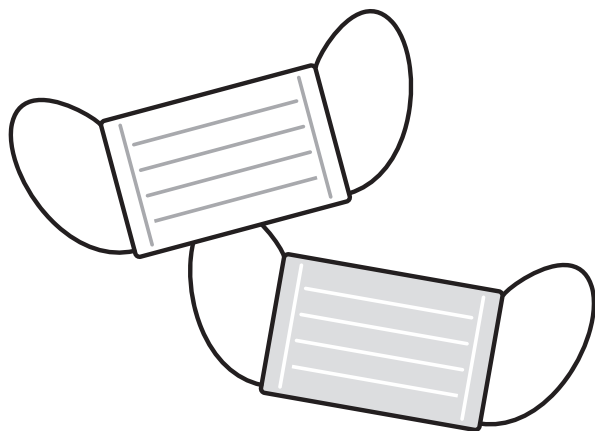
「自閉症の人とかは、それが何だかすら分かっていない人もいる。仮にしんどくなつて検査を受けることになつても、大変なことになるだろう。だからそれ以外のところで感染対策はしているよ。」

自閉症のことは少しだけ知っていた。マンガで読んだことがあった。それが全くだと思っていた。こんなことまで大変だなんて、自分は何も知らなかった。それからいろんなことを考えた。話を聞いてよかったと思う。

障がい者の方がマスクをつけるのは難しいということを知らない人は多いと思う。みんながあたりまえだと思っているから。そうではないということを分かってほしい、知ってほしい。障がい者というだけで、マスクをしてないだけで周りから目を向けられるかもしれない。何も悪くない。「マスクをしてない」ではなく「なんでマスクをしてないのだろう」と思うことができたらいいだろう。でもなかなかできない。だからまずは知ってもらうことからだ。障がい者についてもつと知ってほしい、優しくなつてほしい。私もこう思うけれど、お父さんもこう思いながら毎日仕事をしているだろう。

私はお父さんのやっっている仕事はきらいではない。はずかしくもない。お父さんの仕事は誇りに思う。

誰もができることを簡単にあたりまえだといっではいけない。この状態であたりまえだったことができなくなった。それも含めて考えさせられた。あたりまえってなんだろうと。



私がおくれる人権メッセージ

中学校二年

私は「ノリ」が苦手です。それでも頑張つてまわりに合わそうとしました。少しキツイ冗談も、ノリだから、空気を悪くしてはいけない、と自分に言い聞かせて、笑つて聞きなりました。

小さい頃は、気が強い性格で、思ったことは誰にでもはっきり言えました。中学校にはいつてから、新しいクラス、新しい友達、新しい部活動が始まりました。始めは皆、初対面できんちようしていたのもあつて、仲良くなれるか不安でした。けど、日を重ねていき、だんだん仲良くなれてきてると思いますはじめました。それと同時に、ノリも増えました。初めは、楽しいなあ、面白いなあ、くらいに思えるノリでした。でも次第にノリの度が過ぎていくのを感じはじめました。いつしか発言することさえ怖くなっているということに気づきました。そう思っていたのは、おそらく私だけではなかったと思います。それだけではなく、相手の本心もわからなくなりました。相手はノリで言っているのか本音なのか分からなくなつてしまいました。いったいどこで間違えてしまったのだろう。考えれば考えるほど後悔がつのるばかりでした。

新二年生になりました。今はノリも軽くなってきた、だいぶ過ごしやすくなりました。お互いのことを少し知りました。私はノリの限度を知りました。皆にもノリの限度を超えないで欲しいと思います。発言する前に、その言葉が絶対相手を傷つけないのか、自分はそれを言われて嫌ではないのか想像して下さい。人を傷つけてまでして得られる笑顔など、世界で一番ひどい笑顔です。自分のしょうもない笑いのために傷つく人がいることを自覚して下さい。そして、嫌なノリは嫌と相手に言いましょう。その方がスッキリします!!

これが私がおくれる人権メッセージです。

「性」と「偏見」と「人権」について

中学校二年

岡崎 おかざき

鈴 りん

去年の春のことだ。私はネット上で、ある人と知り合った。年齢が近く、同じ趣味を持つていることから、彼女と私は、すぐに仲良くなった。毎日のようにメッセージを送り合うようになり、その日もいつものように話しこんでいた。そんなときだった。彼女から、「私ね、バイセクシャルなんだ。」というメッセージが送られてきた。彼女は、LGBTだった。突然の告白に戸惑いつつも、私は道德の授業や本で読んだことを思い出し、こう答えた。「偏見ないよ」と、良い答えができたとは勘違いし返したのだ。「私は、偏見がないって言葉嫌い」私はこのとき、この彼女からの返信を理解することができなかった。彼女からの返信は続いた。「皆、私がLGBTだって知ると、決まって言うの、偏見持っていないよって・・・。私はそれが辛い、自分が偏見をもたれる、普通じゃないのだから。」このメッセージを見て、自分の「偏見ないよ」という言葉がどれだけ彼女を傷つけていたかを知った。「皆、私をLGBTの人って扱う、対等に見てくれない」彼女の言葉一つ一つから思いが伝わってくるようだった。自分の言葉を後悔し、彼女に謝罪した。彼女はそれを受け入れてくれた。彼女から送られ

てきた、おどけた泣き笑いのスタンプが、酷く悲しく感じた。

彼女の話から、私は大切なことに気づけた。椅子は座るもの、靴は履くもの、それと同じように、「LGBTの人」には「偏見がない」が模範解答なのだと思っっている自分がいた。私はあの日、酷くいつてしまえば、彼女のことを「同じ人間」ではなく、「違う特別な何か」だと認識してしまったのだ。

「偏見がない」という言葉は、相手と対等にありたい、相手の人権を尊重する、とても素晴らしい言葉だ。だが、捉え方次第では、「あなたは偏見をもたれるような人だ。」と、相手が異常であり、自分が普通であるという言葉にもなる。

実際、人間は、自分で感じたこと、見たことしかわからないので、自分自身を基本にする節がある。自分が普通だと思い、自分と違う人のことを特別視してしまうのは、仕方の無いことなのかも知れない。

だからこそ、私達は、相手の立場に立ち、理解し合おうと努力すること、全ての人間が平等であるという人権について考えること、本や道德の全てを鵜呑みにしないこと、を大切にするべきなのだ。

「偏見がない」という偏見をなくすために。

私は彼女と、これから友達であり続けたい、そして、「性」と「偏見」と「人権」について、考え続けていきたい。

平和について

中学校二年

小^お川^{がわ} 永^え愛^な

今、私のお母さんがけがで入院しています。そこで、いっしょに入院している患者さんが戦争時代を経験していて、当時のお話を聞かせてくれたそうです。教科書にものっていない堺空襲について、つまり私たちが住んでいる近くで起こった戦争の話です。

いろいろ調べてみると、私たちが身近で見ている建物がこの堺空襲で亡くなられた方々に対しての慰霊碑だったということも知りました。その一つが、大仙公園内できわ目立つ平和塔。それは、堺市の戦没者約六五〇〇人、堺空襲殉難者一八七六人を祀る建物でした。私は公園内の目印になる建物なんだと思っていたけれど、とても意味のある大切な建物なのだということを知りました。

それから、もうひとつ調べていて驚いたことがあります。

それは土居川です。この土居川も歴史が深く、四〇〇年にわたって堺のまちを見守り、船の運航や排水路として堺の発展を助けてきました。この川は私が小さいときに、堺の観光も兼ねて小さな船で渡ったことがあります。堺の歴史をガイドさんが説明して

いたとお母さんが話してくれましたが、そのときは、川を渡ることしか興味はありませんでした。しかし、その川に堺空襲で火だるまになった人々が飛び込み、たくさんの人々が亡くなつていったことが衝撃でした。当時の私はそんなことがあつただなんて知らなかったので、びっくりしました。

この堺空襲は、昭和二十年三月十三日深夜堺市上空に米軍機が襲来して焼夷弾を投下、第二次・第三次と続き、波状攻撃により、広範囲に大きな被害を受けました。

その後も、六月十五日、六月二十六日、七月十日、八月十日と五回にわたつて空襲を受け、なかでも七月十日の空襲は激しく、堺市内外で破滅的な被害をうけたようです。

一般的に知られている広島八月六日、長崎の八月九日以外でも日本人がたくさん被害にあつたことを今回の話で知りました。

戦争というのは人の人生を一瞬にして変え、悲しい惨劇を招くものなのだと考えさせられました。

そして、今年も終戦記念日である八月十五日を迎え、七十五年が経ちます。

戦争を経験された方の貴重なお話をもとに、今回改めて平和について考えることができました。

私たちが、今生きている時代は平和です。その日々に感謝して、これからも勉強にスポーツにと大切にすごしていきたいと思いました。

これが私のできること

中学校二年

富^{とみ}田^た和^{わか}奏^な

私は、まだ十三年しか生きていませんが、今まで生きていて初めての経験をしました。そして未だにその生活は続いていて、まだまだ不安に思う日々を過ごしています。その原因は新型コロナウイルスの感染拡大です。ニュースで毎日のように感染者の数や死亡者の数が流れていて、目も耳も塞ぎたくなるけれど、私の弟は肺に疾患があり、弟を守るためにも現実をしつかり受け止めて、コロナと向き合うようにしています。弟は三か月ほとんど家から出ることもなく感染予防に励み、私たち家族も同じように自粛生活を送りました。

そんな中でも、私の母は父のようにテレワークをできる仕事ではなく、医療関係者やライフラインを守る仕事の子どもたちをあずかるために毎日こども園で保育教諭として働いています。その母に、「こんなときにでも園を開けてるのはおかしい。」「園で感染したらどう責任とってくれるの。」など心ない言葉をかける人もいたそうです。外ではこども園の子どもたち、家では弟を含めた私たちのために、母は感染予防を徹底し、周りが不安にならないように努力していました。そんな母にどうしてそんなこ

とをいう人がいるのだろうと、悲しく思いました。私にできることは、母に毎日感謝の言葉をかけたり、話す時間がないときには、ラインなど文字で伝えることしかできなかったのですが、母はそれがとても力になっていたそうです。言う人を止めることはできないけれど、自分を分かってくれる人がいるだけで、気持ちが少し楽になると話してくれました。

コロナウイルスの薬はまだなく、感染しなくても、自粛生活で体だけではなく、心まで攻撃するという恐ろしいウイルスだけど、少しの思いやりと少しの言葉で体も心も軽くなることがあるのだと思いました。まだまだこの生活が続くと思いますが、相手を思いやる言葉と想いを伝えていくことで、今のつらい現実を乗り越えていけるように頑張りたいと強く思い、行動にうつしていこうと思います。

自分を信じて

中学校二年

青^{あお}木^き優^{ゆう}佳^か

私が小学生の頃に知り、とても尊敬している人のエピソードを紹介します。イギリスのダイアナ妃がエイズ患者のお見舞いに行ったときのお話です。

みなさんは「エイズ」という病気を知っていますか。今ではコントロールできる病気になり、偏見も少なくなりましたが、数十年前にはとても恐れられていた病気でした。感染している人に触れるだけでうつると思われていた当時、訪れた病院でダイアナ妃は自ら患者の近くに寄り添い、そして抱きしめました。この瞬間は世界中のメディアで大きく報道されました。私も本でその一瞬を目撃した一人です。ダイアナ妃がエイズ患者に直接触れたことで、触れるだけでうつるという誤解がとけたのです。私たちにとつてはほんの一瞬の出来事でも、エイズに感染している人にとつてはきつと世界が変わって見えたことでしょう。実際、変わったに違いありません。今まで周りの人から冷たく見られ、さけられていたのがなくなつたからです。はじめはたつた何人かの勘違いや、思いこみ、知識不足からはじまつてしまつても広まるのは一瞬です。真実ではない話をあたかも本当の話のように伝えられていくことはすごくひどいことだと

思いました。

では、今の日本ではそんなことが起こっていないと言えるのでしょうか。それは絶対に言えないと思います。なぜなら、新型コロナウイルスで同じことがたつた今、日本で起きているからです。最近では、感染者やその家族を非難して誹謗中傷するニュースをよく目にするようになりました。SNSも活発になって今の社会だからこそ真実ではない情報や、勘違いが多くの人に広まり、さも真実かのようになってしまうています。手軽で身近なSNSですが、たくさんさんの情報にふり回されないように一人一人が注意しなければいけません。つぶやいている側はほんの少し思っただけかもしれないけど、聞いた側はそうではありません。言葉を発信したものはそれだけで大きな力を持ちます。人を幸せにすることもある反面、その一言が人の人生を大きく変える可能性もあるのです。それをしっかりと心に刻みこむ必要があると思いました。

新型コロナウイルスによるパンデミックは百年に一度と言われています。それだけ、みんなが経験したことの無い恐ろしい病気であることは確かです。私たちは日頃からアルコール消毒や手洗い、三密防止など様々なことに気を遣いながら生活し、しっかりと予防することで一人一人の義務を果たしています。しかし、どれだけ予防しても感染してしまうこともあります。そのとき、自分ならどうするか、周りの人ならどう接するか、当事者の立場になって思いやりのある行動をとれるようにしたいです。また、

正しい知識を学ぶことが大切であると感じました。今回の新型コロナウイルス情報を機に、ダイアナ妃のように自分を信じて正しいと思ったことをできる人になりたいと思いました。



かけがえのない笑顔

中学校三年

高 たか
畑 はた
千 ち
愛 なり

私には夢があります。その内の一つが、幼稚園の先生になることです。以前、幼稚園で職場体験をさせていただきました。初めての体験で不安もありましたが、子どもたちの屈託のない笑顔に励まされて、楽しく過ごすことができました。

しかし最近、子どもへの虐待に関するニュースをよく見かけるようになりました。そのたびに、まるで自分の家族が傷つけられているような気持ちになり、苦しくなります。私でさえそうなのに、当事者たちはどうしてそんなひどいことができるのでしょうか。

私が今までで一番衝撃を受けた事件が、二〇一八年の「目黒女兒虐待事件」です。五歳の女の子が、実母と継父から度重なる虐待を受けた末、亡くなりました。その際、女の子が残した反省文が、連日ニュースでも取り上げられていました。反省文には、子どもとしての当たり前の権利を否定されることばかり書かれていました。「しつけ」を言い訳に、感情に任せて行われた理不尽な虐待でした。

私は四人兄妹です。母が私たちを叱るときは、その前に何故その行いがいけないの

か説明と注意をしてくれます。結果叱られても、自分自身納得ができるのです。四人いるので、それぞれ違う性格と行動ですが、母は根気強く私たちに向き合ってくれています。日頃から大事に育ててくれているという安心感があるので、学校や友人関係で疲れたときも、家に帰るとほっとするのです。

安全と安心が保障されるべき家庭で虐待が行われるということは、逃げ場が無いということです。そのような環境では、自分の心を殺し、ただひたすら時が過ぎるのを待つことしかできなくなります。誰もが平等に与えられるはずの安全で健康的な生活・自由・幸福の追求それを知らずに育つ子ども、命を奪われる子どもがいることを、私たちは知らなければいけません。

一人一人がかかけがえない存在です。大人から大切に育てられることで、子どもも自分の存在を肯定することができるのです。そのためには、大人も自分自身を肯定する心が必要だと感じました。虐待やいじめは、自分の弱さを隠すために、自分より弱い立場の人間を攻撃して、虚栄心を満足させる行為に過ぎません。ありのままの自分を受け入れてくれる居場所があれば、自分以外の存在を認めることができるのではないのでしょうか。子どもの笑顔があふれる社会であるために、親だけではなく、地域や社会で支え、「児童虐待」が存在しない世の中にしていきたいです。

父がくれた命と言葉

支援学校高等部三年

久^く 堀^{ぼり} 榛^{はる} 奎^き

僕は中学一年生のときに、自分の耳が聞こえにくいことで、すごく悩んだことがあります。そのきっかけとなったのが、僕の弟と、弟の友だちとのけんかでした。僕の弟が、僕が聞こえないことを友だちに話すと、友だちが僕の耳が聞こえないことをばかにしたので、それに対して弟が怒ったということでした。

それまでは、自分は聴覚支援学校の中でも聞こえる方だと思っていたのですが、けんかの原因を聞いて、

「何でばかにされないといけないんだ？」
という疑問と、

「何で自分は聞こえないんだろう？」
という悩みが生まれました。その日からずっと悩み続け、だんだんと「死にたい。」
と考えるようになりました。

その苦しさに耐え切れなくなつたある日、父にその悩みを打ち明けてみました。すると父は、次のような話をしてくれました。

「お前は、未熟児で産まれたんだ。生まれてくる可能性は、ぐんと低かった。生死をさまよう中でお医者さんたちががんばって手術をしてくれ、助かったんだ。でもその代わり、目と耳が不自由になったんだ。でもお父さんは、障がいを持っていても生まれてきてくれて嬉しかった。生まれてきてくれて、本当にありがとう。お父さんもつらいことたくさんあるけど、お前を見ると、元気になるんだ。大きな活力になる。障がいのある子どもでも、お父さんとお母さんの大事な子どもなんだよ。お前と普通の人との違いは、聞こえないということだけだろ？障がいというハンデはあるけど、そんなもの気にすんな。お父さんの役目は、お前を立派な一人前の大人にすることだ。これから先の人生は楽しいことがたくさんあるよ。一番親不孝なことは、何か分かる？それは、親より子が先に死ぬということ。自殺だけは絶対にするな。」

父の強くはつきりとした言葉が、今でも心に残っています。

それから僕は、障がいの有無に関係なく、自分らしく生きていこうと考えるようになります。もしかしたらこれからも、聞こえないことで「死にたい。」と思うことがあるかもしれませんが。しかし、前向きに新しい気もちで生きていきたいです。自殺は周りの人を悲しませる、本当にしてはいけないことだと思います。僕はがんばって生きぬいて、いつか父に恩返しをしたいと思います。

これからの女性の活躍

急激に少子高齢化が進む中、深刻な労働力不足に直面すると考えられているが、女性には貴重な潜在力である。

女性が社会で活躍することは、働く意欲のある女性自身の成長に繋がり、社会や経済において多くのプラスの経済効果が考えられる。

私が入社した二十数年前は、“ダイバーシティ”という言葉はなかった。大半の女性は結婚・出産を機に退職し、家庭生活に専念する。当時、私の部署においても例外ではなく、私自身も結婚と退職の報告を行った。しかし、当時の上司は「辞める理由は外にありますか？女性は今後活躍していくべきです」と引き留めてくださった。また、出産の際も周りからは、子どもは母親の鼓動を聞いて育てるべきであるや、残業ができなくなるのではないか？など多くの意見がある中、当時の上司、同僚のお力添えもあり、部署で初めて産休、育休を取得することができた。私の職場においては、当時より女性が働きやすい職場、相手の立場になって考え、行動できる職場であったのではないかと考える。現在は行政が育児のための後押しをし、制度が確立されている。

しかし、まだ多くの壁があり女性が活躍できる環境が整えられていないのが現状だ。特に人員に余裕がない中小企業においては育児休業をとることが容易ではなく、このため出産や育児を機に退職する女性も少なくない。そこで育児休業に伴う代替要員を雇うための助成金制度をさらに充実させるなど、行政が育児休業を後押しすることが求められる。女性だけでなく男性も育児休業を取りやすくなれば、男性の育児への参加を促すことに繋がる。また、育児や介護などそれぞれのライフステージに合わせて多様な働き方を増やしていくことも求められ、在宅勤務制度や短時間勤務制度など働き方を普及させていく必要性があると考ええる。

今後多くの女性が社会で活躍することで人材の層が厚くなり、新しい視点・新しい価値観・細やかなサービスが生み出され、社会や経済が活性化されるのではないかと考える。

また、誰もが思いやりの気持ち忘れず、働きやすい職場であるよう一人一人が行動していかねばならないし、私自身、意識しさらに成長していきたい。それが女性も男性もそれぞれが持てる力を充分に発揮することができると考える。

大人になる中で失ってしまったもの

成人

先日、妻の要望もあり、長野県にある安曇野ちひろ美術館へ行くことになった。子どもの絵で有名な画家いわさきちひろ氏の作品を多数展示している美術館であるが、館内を見学していると、ある本が私の目に留まった。「窓ぎわのトットちゃん」である。著名な本であるが、今まで読んだことが無かったので「これも何かの縁かな」と軽い気持ちで購入し読み始めたのであった。作中では、トットちゃん（黒柳徹子氏）をはじめとする様々な個性を持った子どもたちが生き生きと学校生活を送る様子が描かれている。本作を読み進める中で、自身の幼少期を思い出し、目頭が熱くなった。

私は、ろう学校のある田舎で育ったこともあり、小さい頃から聴覚障がいを持った友達と遊ぶことも多かった。小さい頃の私が、どのような気持ちであったかは覚えていないが、その友達のことを耳が聞こえないという「個性」を持った友達として認識し、自分との「違い」をポジティブに受け入れて遊んでいたように思う。年齢を重ね小学生にもなると、その友達は近所のろう学校へと入学したため、一緒に遊ぶことが少なくなり、関係も徐々に疎遠になっていった。ただ、年に数回程度、私に通っていた小学

校と交流学习を行う機会があったため、かろうじて関係性は続いていた。しかし、小学校高学年になったある日、私は自身の弱さにより、その友達との関係を断ってしまふことになるのである。課外学習でキャンプをすることになり、私は、その友達と同じ班になった。大自然の中で遊んだり、カレーを作ったりとキャンプを楽しんでいたのだが、他の班の友達から「赤木のやつ、優等生ぶって先生に気に入られようとしやがって」と陰口を叩かれているのを偶然、聞いてしまったのだ。小学校高学年にもなり周囲の目も気になりだした私は、その日以降、聴覚障がいを持った友達との関わりを避けるようになってしまった。もし、あのとき、周囲との考えの「違い」をポジティブに受け入れ自分自身を出すことができていたらという後悔は今になっても心の中に残っている。

私たち大人は、成長過程の中で様々なことを得るが、その逆で失ってしまうものも少なくないと考える。「窓ぎわのトットちゃん」に登場する小林校長先生は、「どんな子も、生まれたときには、いい性質を持っている。それが大きくなる間に、いろいろなまわりの環境とか、大人たちの影響で、スポイルされてしまう。だから、早く、この『いい性質』を見つけて、それをのばしていき、個性のある人間にしていこう」という教育方針を持ち、学校を運営されていた。もし将来、私達夫婦が子どもを授かった際には、いい性質を伸ばしてあげ、大事なものを無くしてしまわないよう、見守り、支援していきたいと思う。自分のような後悔をさせないように。

祖母の知りたかったこと

成人

日本では現在高齢化が進んでおり、平成三十年の総務省の統計によると、国民の三割近くが高齢者（六十五歳以上）になっている。そしてこの数字に違わず、自身の職場含め様々な場所で、六十歳を超える方々と関わる機会が多くなった。そんな状況の中で高齢者の方々と、どのように関わるか、一昨年亡くなった祖母との会話を通してふと考えることがあった。

祖母は、私の住む家から離れて暮らしていたため頻繁に会うことはできなかった。しかし、会ったときは彼女の仕事や友人のことなど、沢山の話をしてくれた。また、新しいことへの好奇心も旺盛で、毎日英語や俳句の勉強をして沢山の人と交流していた。自分より六十以上歳が上だが、私よりも元気で生き生きと過ごしていた。

そんな祖母が八十八歳で亡くなる直前、久しぶりに会ったときに、「ひろちゃん、おばあちゃんの携帯でいろんな店の電話番号や営業時間がわかって聞いたんだけど、調べ方を教えてくれない？」と聞かれた。そのとき、私は祖母に知りたい店の名前を聞いて営業時間や電話番号を自身のスマホで調べて教えてあげた。祖母は何かを言い

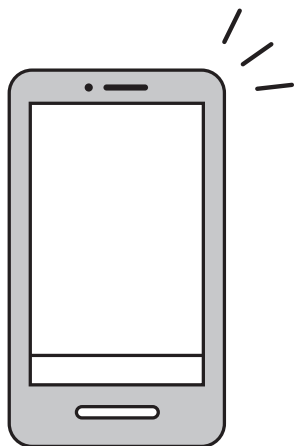
た気に、寂しそうな表情で「ありがとう。」と言ってくれた。そのときの自分は、祖母が喜んでくれた、感謝してくれた、と思っていたが、亡くなった今になって、なぜあんな寂しそうな顔をしていたんだろう、何があのとき言いたかったんだろう、と考えることがあった。

私は、もう八十代後半になって、携帯の新しい使い方を知っても覚えられないだろう、すぐ忘れてしまうだろう、だから代わりに自分がやってあげるべきだ、とどこかで思ってた祖母の代わりに調べた。しかし、祖母は、自分がこれからできることを少しでも増やしたいという気持ちで聞いてきたのではないだろうか。自分は優しいつもりで、祖母の一つの学びの機会を奪ってしまったのではないだろうか。

私は、祖母の年齢だけで、この歳ならこれはできないだろう、この歳ならこれはできて当たり前だ、と決めつける気持ちはどこかにあった。自身の祖母にさえそうだったので、きつと他の高齢者の方々への対応にはもつと顕著に表れるに違いない。そしてこれは、私だけでなく社会全体にも言えることだと思う。

今回のことから、その人が何を望んでいるかをまずは考えるべきだと思った。その上で、何ができて何ができないかを、年齢という情報だけで決めつけるのではなく、その人の身体的又は能力的な状況を実際に見極め、その上でそれに対して自分はどうな手助けができるのか考えるようにしようと思った。そういう思いが、これから更に

高齢化が進む日本において、年齢に縛られず一人ひとりを大切にする行動の一步なのではないだろうか。



迷いのトンネル／日本語学習

成人 陳 ちん
惠 ふえい
華 ふあ

私は、仕事で台湾に来ていた夫と知り合い、来日、もう三十年以上になります。漢字の国からといっても、読み方も意味も違うし、台湾にひらがなはありません。

「大丈夫」は台湾では「男らしい男」の意味。

「大丸」を「おまる」と読んで笑われました。

ビルの管理、お好み焼き屋、料亭の洗い場、社長のお母様の世話などいろいろ働きました。お好み焼きも台湾にはない。テコでひっくり返すのは難しく、粉の配合も難しくして失敗ばかり。店長はいらいらして、私のところまで来て足をふみつける。もう、情けなくて。

昼間の仕事を終えてから、料亭の洗い場で皿洗いの仕事。平日は大阪に住み、土日は夫の家で、という生活。数年前、堺の夫の家から仕事に通うようになり、人権ふれあいセンターの日本語教室「つどい」に入れてもらいました。

「日本人のように話したい!」「日本語を一から学びたい!」と、思っていたからです。日本の漢字は難しい!でも、勉強は楽しい!ひらがなも何度も何度も練習しました。

社長あてに年賀状を書いたとき、年賀状には、「や」「は、つけないのだと習いました。日本人のように文を読むことはまだまだです。伸ばす音「ー」とつまる音「っ」の読み方がなかなか上手くないかない。

昨年三月、介護ヘルパー初任者研修を受けました。仕事も休まず、夜遅くまでノートをまとめていると、夫はやさしく「よく頑張るなあ」と、鉛筆を削ってくれました。介護ヘルパー二級合格！夫もニコニコ顔でした。

昨年秋、久しぶりに台湾に帰国。台湾の人たちは、いっぱいのご馳走で大歓迎！もつたいたないようなぜい沢な生活でした。「さあ、上がって！」と、受け入れてくれる気さくで開放的な台湾から日本に戻ると、日本の閉鎖的な部分を感じて、少し寂しくなりました。日本人はやさしい。でも「本音」と「たてまえ」がよくわからない。親しくなつても、「低い壁」が間にあるようで寂しくなる。

若い外国人は、日本語が少しできるようになると、昼間の教室はすぐやめてしまう。親しくなつても、すぐお別れだ。

台湾から戻ったとき、つどいでは、秋のフェアの舞台練習が進んでいて、一瞬おきざりに、なったような寂しさを感じました。仕事の面でも電車の乗り換えが増えたこと、弟妹が来日するなど、生活のあわただしさもあり、台湾に帰ったらもう日本語いらないしなあ。日常生活には、困らないしなあ。歳もとつてるし、もう勉強やめようかなあ。

残りの人生、おもしろおかしく過ごすのがいい？仕事や勉強頑張ることで、充実感や幸せをたくさん味わうのがいい？「えっ、どういうこと？」など、外では聞きにくいことでも、「つどい」でなら聞けるよね？トンネルの中で自問自答を繰り返した。

入院先から戻って来られた社長のお母様が「陳さん、長い間ありがとう」と、心からこの重みのある言葉に、心が揺れた！

私は日本が好き！日本語をもっと磨き、日本の文化を理解する。もしかして「閉鎖的」は、人と人との関わりに慎重だということ？日本人と同じ立場で話していただけるだけの力をつけて、台湾の親族にも繋げていく。

新しい年、やつとトンネルから抜け出た私。コロナの時代を乗り切り、日本の素晴らしいさを信じて、悔いのない人生にしたい！です。



炭鋤の町に生まれて

成人（中学校夜間学級三年）

黒^{くろ}木^き 福^{ふく}美^み

私は九州の福岡県筑豊の炭鋤町で生まれました。その頃の炭鋤の住宅は、だれもが貧しく、隣近所が助け合って生活する毎日でした。小さいときから私たち子どもの仕事は、近所のボタ山に登って燃やすことのできる石炭を探すことでした。ボタ山というのは使い物にならない石炭を捨てた小さな山なのですが、その中から使える石炭を探して売りに行くのです。今でも、貧しい国で子どもがゴミの山から使える物を探しているのをテレビで見ると自分の子どもころと重なって、涙が止まりません。

父は炭鋤夫でした。真面目で朝早くから、真つ暗な炭鋤に下りていつて働いていました。さまざまな事情で、母にかわって弟たちの面倒をみることになったのは、私が小学生のときでした。それから学校に行くことができなくなりました。しっかりとした知識を身につけることができないままに社会に出て働きました。二十歳になった年に、父は炭鋤の爆発事故で亡くなりました。そのとき、下の弟はまだ小学生でした。私は鉄工所や陶器のメーカーで、力仕事をして家計を支えました。

今考えると、その頃の筑豊の炭鋤地帯には学校に行くことができない子どもは、私

だけではなくたくさんいました。また、学校に行けたとしても、落ち着いて勉強できる環境になかった子どもも、大勢いました。でも、九州には夜間中学はありません。大人になって勉強を取り戻そうとしても、学びの場がないのです。

たまたま大阪に転居し働き続けていた私は定年を迎えて殿馬場中学を知ることができました。入学して、一年はあつという間に過ぎてしまいました。それでも、漢字やローマ字が少しずつ読めるようになり、「学び」の喜びを味わう毎日が続いています。

私に学びの喜びを与えてくれた夜間中学は先輩たちが努力して勝ち取り守ってきてくれたものです。そう思うと、小さな力ですが、私も何か役に立ちたいと、生徒会役員として頑張っています。殿馬場中学では、エレベーターが二〇一八年三月に設置されました。これは車いすで通う生徒の要求を生徒会全体の要求として、十年以上の年月をかけて実現したものです。だれでも、どこでも、いつでも学べる場所が世界中に広がってほしいと心から思います。私たちはいつまでも学び続けたいのです。学べなかったという心の飢えは、汲めども汲めども満たされることなく、学ぶ意欲は枯れることはありません。

就学援助の年限が延長され、心置きなく勉強できるよう粘り強く働きかけていきます。そのためにも、勉強をこれからも頑張ります。

選考にあたって

このたび「第四十二回わたしからの人権メッセージ」に応募していただいたみなさん、ありがとうございます。また、特選を受賞された二十名のみなさん、入選を受賞された三十名のみなさん、おめでとうございます。

今年度は、二千四百三十五点にも及ぶ多くの作品が寄せられました。このうち小学生が五百九十四点、中学生が八百四十二点、高校生が九百五十二点、成人が四十九点でした。この取り組みにより、さまざまな年齢層の方からすぐれた作品が多く寄せられたことを、審査員一同、うれしく思います。選考では、一次審査で二千四百点を超える作品を五十点に絞り込み、さらにその中から二十点の特選作品を選出いたしました。審査にあたっては、さまざまな体験や知り得たことを自分自身の問題として捉えられているか、差別をなくすためにどのように行動しようとしているか、またその作品が広く市民の人権意識向上につながるものであるかを、大切なポイントといたしました。

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、心から安心して生活できない状況が続いていることから、テーマや年齢に関わらず、命について考えさせられるものが多くありました。学校からは、

平和の大切さやセーフシティさをテーマとした作品、企業からは、SDGs（エスディー・ジーズ）の取組について書いた作品が寄せられました。また、全体としては、SNSでの誹謗（ひぼう）中傷などの報道から、メディアリテラシーの重要性等を書いたものなど、他にも、さまざまなテーマの作品が寄せられました。

どの作品からも、お互いを思いやる気持ちや人権に対する募る思いが感じられ、自分にできることを一生懸命考える真摯な姿勢に、強く心を打たれるものがありました。素晴らしい作品との出会いを、ありがとうございます。

また、メッセージとして届いていない人権課題や声なきSOSもあると思います。そのことを忘れずに、私たちは今後も人権を守るための積極的な活動に取り組んでいきます。

「わたしからの人権メッセージ」を契機として、すべての人が人権問題を自分自身のこととして捉えて行動し、堺から人権文化の花が咲き、人権尊重の輪が家庭、学校、職場そして地域社会へと広がっていくことを願っております。

審査員長 山口 典子

（堺市人権教育推進協議会副会長）

応募作品テーマ内訳表 【応募数】

(単位：点)

テーマ \ 学年	小 学 校		中 学 校	高等学校 /大学	一般	分野別 合計
	低学年	高学年				
同和問題	0	65	3	1	0	69
女性の人権	0	5	20	5	3	33
障がい者の人権	2	17	83	39	9	150
外国人の人権	0	12	95	40	3	150
子どもの人権	7	34	89	122	3	255
高齢者の人権	3	3	4	5	2	17
LGBTなど性的マイノリティの人権	0	3	35	18	4	60
平和問題	45	237	41	97	2	422
環境問題	3	22	48	48	1	122
HIV感染者・ハンセン病回復者等の人権	0	1	1	2	0	4
犯罪被害者やその家族の人権	0	4	12	5	0	21
インターネットと人権	0	8	108	151	2	269
SDGs(持続可能な開発目標)	0	0	3	2	3	8
セーフティさかい	0	4	0	1	0	5
憲法と人権	0	4	2	1	0	7
新型コロナウイルス感染症に関連する人権問題	22	15	197	294	7	535
その他さまざまな人権について	50	28	100	120	10	308
学年別応募数	132	462	841	951	49	2,435
年代別応募数	594		841	951	49	2,435

【今年度応募作品の傾向について】

- テーマや年齢に関わらず、命について考えさせられるものが多かった。
- 新型コロナウイルス感染症に関連する人権的配慮が社会問題となる中、休校中だった学校が再開して思ったことや、医療関係者等、社会を支えるすべての人へのメッセージなどが多く集まった。
- インターネットと人権をテーマとした作品では、SNSでの誹謗(ひぼう)中傷をきっかけとして亡くなった有名人の報道から、メディアリテラシーの重要性を書いた作文が多く、関心の高まりを感じられた。
- 今年度は、終戦から75年ということ、また、学校教育で熱心な平和学習の取り組みがあったこと、そして、新型コロナウイルス感染症の影響で心から安心して生活できる状況ではないことから、平和の大切さについてより一層考えた作文が多くみられた。
- レジ袋の有料化が開始されたことから、環境問題について考えるきっかけとなったという作文や、黒人差別の報道を受けて、差別について考えたという作文など、いろいろな角度から人権について考えられた作文があった。

御応募いただいた学校その他団体名

浅香山小学校	☆市小学校	☆英彰小学校	☆榎小学校	☆家原寺小学校
☆鳳南小学校	金岡小学校	金岡南小学校	☆神石小学校	☆北八下小学校
さつき野小学校	三宝小学校	白鷺小学校	城山台小学校	☆新金岡東小学校
☆泉北高倉小学校	津久野小学校	錦小学校	庭代台小学校	上神谷小学校
☆土師小学校	八田荘小学校	浜寺小学校	☆浜寺東小学校	東陶器小学校
東三国丘小学校	平岡小学校	福泉小学校	☆榎塚台小学校	向丘小学校
安井小学校	熊野小学校			
☆赤坂台中学校	上野芝中学校	☆大泉中学校	大浜中学校	☆金岡北中学校
☆金岡南中学校	五箇荘中学校	堺聴覚支援学校中学部	☆津久野中学校	殿馬場中学校
☆殿馬場中学校夜間学級	長尾中学校	☆原山台中学校	晴美台中学校	平井中学校
福泉南中学校	☆美木多中学校	☆南八下中学校	美原中学校	三原台中学校
美原西中学校	☆陵西中学校	若松台中学校		
大阪商業大学堺高等学校	堺高等学校	☆だいせん聴覚高等支援学校	農芸高等学校	

☆(株)クボタ堺製造所

☆堺識字・多文化
共生学級「つどい」

☆堺自由の泉大学

※五年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。

(五十音順)

ご協力ありがとうございました。

審査員

江川 玲子
（堺市教育委員会生徒指導課指導主事）

越智 主
（堺労働基準監督署副署長）

木谷 浩
（堺公共職業安定所管理部長）

小林 拓之
（大阪法務局堺支局総務課長）

瀧口 住子
（堺市立男女共同参画センター館長）

西尾 宜精
（堺市人権教育推進協議会常任幹事）

松尾 恵子
（堺市総務局人事部人材開発課長）

間野 裕季子
（堺市人権教育研究会事務局次長）

森内 啓子
（堺市人権教育推進協議会会計）

山口 典子
（堺市人権教育推進協議会副会長）



私たちのまち堺から
人権文化の  を咲かせよう

この作品集は、「第41回わたしからの人権メッセージ」に
応募された2,435点の作品のうち、特選作品20点を掲載したものです。